

民間信仰における神形象の変化について 華光大帝と招宝七郎を例に

その他のタイトル	Transformation of Gods in Chinese Popular Religion Especially 華光大帝 (Huaguang Dadi) and 招寶七郎 (Zhaobao Qilang)
著者	二階堂 善弘
雑誌名	東アジア文化交渉研究 = Journal of East Asian Cultural Interaction Studies
巻	1
ページ	179-186
発行年	2008-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/3177

民間信仰における神形象の変化について

— 華光大帝と招宝七郎を例に —

二階堂 善 弘

Transformation of Gods in Chinese Popular Religion
Especially 華光大帝 (Huaguang Dadi) and 招寶七郎 (Zhaobao Qilang)

NIKAIDO Yoshihiro

This short essay takes up Huaguang Dadi and Zhaobao Qilang, known as temple guardians, and chiefly examines the idea that the form of some gods has been influenced by others.

Huaguang Dadi is also known as Ma Lingguan. During the Ming Dynasty, he was shown with a third eye, he had no beard, and he was known for holding a gold brick in his hand. Wang Lingguan, on the other hand, is enshrined as the Taoist guardian deity, to the extent that it can be considered to “always” exist in Taoist temples, especially those of Quanzhen Jiao's sect. Both of these gods have a number of common features, including three eyes. For a number of reasons, it can be thought that Wang Lingguan and Guangong respectively succeeded the function of Huaguang (the remaining demon) as temple guardian.

Zhaobao Qilang is also given the character of a sea god, and his appearance includes the feature of raising one hand and looking into the distance. Another sea god that similarly looks off into the distance is Qianli Yan. However, that wasn't the original form of Qianli Yan and his appearance of looking off into the distance might have been due to the influence of Zhaobao Qilang. There is a god named Daxi Sikong in the Nanhai Shenmiao temple of the South Sea God of Guangzhou Province whose image takes on the appearance of looking into the distance as well. Thus, there is the possibility that the form of sea gods looking off into the distance was influenced by other gods that had the same look.

キーワード：民間信仰、伽藍神、道教

はじめに

中国の民間信仰においては、特定の神の信仰が盛んになったり、衰えたりする現象が不断に起こっている。後漢時代に一世を風靡した城陽景王の信仰は、その後見る影も無く衰えたし、六朝期に盛んに信仰された神々は、宋代にはすでにその大半が消失してしまっている。現在中国の民間信仰で祭祀される媽祖や関帝や八仙などの神々は、ほとんどが宋代以降に発生し、明清期にその信仰が定着したものである。

る。

一方で、多くの神々の形象はまた絶えず変化している。八仙の人員は、明末に至るまでは固定しなかったし、その持ち物や姿についても、元と清ではかなり異なっている¹⁾。

しかし、ある特定の神の形象が変化する一方で、ある神から神へと、その形象が転移する、または模倣されていくことについては、これまであまり検討されてこなかったように思える。小論では、寺院の伽藍神である華光大帝と招宝七郎を例に取り上げ、その信仰が衰えた後に、その形象が他の神に受け継がれた可能性について論じてみたい。

1. 華光大帝の形象について

華光大帝は非常に複雑な変遷を経ている神であり、またその性格も時代ごとに大きく変わっている。

その信仰が最も隆盛であったのは明代である。その頃の華光大帝は、中国南方では知らぬ者の無いほど著名な神であり、また寺院を守護する伽藍神としても祀られていたと考えられる。その時の姿をいまに伝えるものとして、宇治の黄檗山萬福寺の像が存在する。

この像が残されていることにより、我々は多くのことを知ることができる。すなわち明代には、華光大帝が「菩薩」として伽藍を守護する神と見なされていたこと、またその姿は、三目であり、無髯であり、手に金磚という武器を持つことが判明する（写真①）。

華光はまた道教では馬元帥、また馬靈官という神として扱われる。武当山などにおける馬靈官の形象は、甲冑姿であるものの、やはり三目・無髯・手に金磚を持つという特色は共通している。すなわち、明代の華光大帝の姿とは、この姿が標準的なものであったと考えられる（写真②）。

『三教搜神大全』や『南遊記』などに描写される華光の様子は、三目や金磚に加え、さらに風火輪に乗るという姿もある²⁾。また、広東省仏山にある祖廟においては、馬元帥は三目であるものの、髯があり、さらに筆と書を手を持っていた（写真③）。上海白雲觀にある馬元帥像も、片手に戟、片手に書物を持ち、首から金磚を下げる。恐らく、書物を持つ馬元帥の姿も一部では流通していたようである。

実際のところ、華光大帝は複雑な変遷と融合を経てきた神である。元来、五通神との関連が強く、また後には五頭神との結びつきもある。火の神であり、密教の影響を濃厚に受けて成立した神であると考えられる。

その初期の姿と思われるものは、胡文和氏が紹介している四川の石窟に祀られる南宋期のものである³⁾。この像は「五通大帝」とされるものだが、魁偉な容貌であり、また三眼ではなく、さらに片方の足を挙げています。

これを明代の一般的な華光の像と比べると、似ても似つかない形象である。むしろ、日本において祀

1) 八仙の信仰の変容については、拙稿「『八仙東遊記』における「過海」故事の変容」、(『東方学の新視点』五曜書房・2003年) 343~368頁参照。

2) 馬元帥華光については、詳しくは拙著『道教・民間信仰における元帥神の変容』(関西大学出版部・2006年) 180~189頁を参照。

3) 胡文和『四川道教仏教石窟芸術』(四川人民出版社・1994年) 17頁。

られる蔵王権現の姿に似ていると言えよう。特にその片足を挙げるところは、影響関係があるのではと疑わせるものがある。そもそも、華光には「華光蔵王」という称号もある。もっとも、これは単に憶測に過ぎない。この像が何故片足を挙げるのかと言え、すなわち仏教における「独覺」が訛した結果、「独脚」となり、それが像に反映したものと考えられる。

このように、南宋から明にかけての華光の姿は大きく異なる上に、また馬元帥としての形象、五顯神としての形象にも若干の相違がある。ただ、明代に広く知られていた形象は、やはり三眼に無髯、金磚に矛戟を持つ武神の姿であることは間違いのないであろう。ところが、清代には華光神の信仰は衰えていき、廟や神像も減少していった結果、その姿についてもあまり知られなくなってしまった。

2. 馬靈官から王靈官へ

王靈官は道観、特に全真教系の道観には必ずと言ってもよいほど、その守護神として祀られている神である。中国の道観を訪れてみれば、門をくぐってすぐの所に「靈官殿」があり、ここに鞭を振り上げ、輪に乗り、三眼にて有髯、かつ威嚇するような表情の王靈官の像が祀られているのを目にすることができよう（写真④）。

王靈官の祭祀が元から明に盛んになったことについては、奈良行博氏の論に詳しく述べられており、また同じく「靈官」の称号を持つ馬靈官との比較も行われている⁴⁾。氏がそこで指摘するのは、古くは王靈官は三眼を持っておらず、むしろ二目であり、後に馬靈官との混同が起こった結果、三眼を有するようになったということである。氏の指摘は非常に的確なものと思われるが、ここではさらに三眼以外の面についても考えてみたい。

道教經典において、王靈官がどのように現れるかについては、すでに拙著にても指摘した通りであるが⁵⁾、『道法会元』⁶⁾において火神の代表としてしばしば登場する王靈官は、奇妙なことに『法海遺珠』⁷⁾においてはその姿が全く見えない。これからするに王靈官の信仰は、馬靈官や趙玄壇などに比して、やや新しく発展したものと推察されるのである。

すなわち、馬靈官と王靈官の信仰には、その隆盛となった時期にズレが存在する。馬靈官華光が元から明に信仰が盛んで、その後衰えたのに対し、王靈官は明から信仰が盛んになり、清代を経て一時弱まったとはいえ、現在もまだ続いているのである。なお、広東地方や福建の一部においては、華光もまだ信仰を保持している。

この両者には三眼の他、多くの共通点がある。輪に乗ること、火神であること、強力な武神であると考えられていること。一方で不一致もある。馬靈官は財神であり、手に金磚を持ち、無髯である。王靈官は財神としての性格は薄く、金鞭を持ち、有髯である。

4) 奈良行博「道教護法神・王靈官 ― その信仰の展開」（『中国思想における身体・自然・信仰』東方書店・2004年）471～489頁。

5) 拙著『道教・民間信仰における元帥神の変容』206～213頁。

6) 『道法会元』（『正統道蔵』正一部S.N.1220）

7) 『法海遺珠』（『正統道蔵』太平部S.N.1166）

王靈官が金鞭を持つのは、恐らくは普化天尊からの影響を受けているためと思われる。すなわち、王靈官は馬靈官より多くの形象を引き継ぐ一方で、他の神からの影響を受けて、その姿を変化させている可能性が高い。これもやはり、王靈官が比較的新しく発展した神であることを反映しているものであろう。

問題は、何故現在、王靈官が道観の守護神とされているかである。『道法会元』などの比較的古い時期の道教経典には、それを窺わせるものは少ない。或いは、この機能も、馬靈官から引き継いでいる可能性がある。

むろん馬靈官は温・関・馬・趙の四大元帥の一つとして、守護神としての機能がある。さらに、宇治萬福寺の例から知られるように、仏教寺院において伽藍神として扱われていた可能性も高い。

一方で王靈官はと言えば、これも実際には寺院で伽藍の守護神として扱われている例がある。安徽の九華山は、地藏菩薩の霊場として有名な山であるが、ここの寺院の多くは、天王殿の前に靈官殿を置き、王靈官を祀っている（写真⑤）。

そもそも火神が何故伽藍神として祀られるのかについては、火災を避けるためという意味合いが強い。そのため、馬靈官や王靈官の他にも、火徳星君のような神が祭祀されることもある。恐らく、馬靈官の信仰が衰えたために、王靈官にその伽藍神としての性格が引き継がれたのではないかと考えられる。しかし、一方で現在の寺院の伽藍神は関帝となっている。華光の伽藍神としての機能は、王靈官と関帝にそれぞれ受け継がれ、そしてかつての伽藍神としての姿は、宇治の萬福寺でしか確認できないのである。衰えた神がある一方で、その神の機能は、形を変えて他の神に移転して受け継がれるのであろう。

3. 招宝七郎と千里眼

宋代の伽藍神として、招宝七郎という神があったが、この信仰は後に衰えて、中国ではその祭祀がほとんど見られなくなったことについては、別に論じた⁸⁾。

この招宝七郎は、別に海神としての性格を持っている。そして、その姿は片手を挙げて遠望する形象をとることが特色である（写真⑥）。

遠望する姿は、恐らくは航海する船を守護するという連想を引き起こしやすいということがあるだろう。そのため、海神や航海守護の神にこの形象が使われるのは、十分にあり得ることだと考える。

この遠望する形象を取る神で、現在最も著名な神は、航海神媽祖の部下の一人として有名な、千里眼であろう。媽祖廟に行けば、その媽祖の前を守るのは必ずと言ってもよいほど、片手を耳に当てる順風耳と、手を挙げて遠望する千里眼の二像がある（写真⑦）。

招宝七郎から千里眼への影響については、残念ながらはっきりしたことは分からない。ただ、招宝七郎の海神としての信仰が衰えて、媽祖神へその機能を移していった時に、千里眼がその形象を受け継いだことは十分に考えられる。

8) 拙稿「海神・伽藍神としての招宝七郎大権修利」（『白山中国学』通巻第13号・東洋大学中国学会・2007年）43～54頁参照。

それというのも、元来千里眼の像はこのような遠望する形象を取らなかったと推定されるからである。広東の広州の東にある南海龍王の廟に祀られる千里眼は、華光のように三眼であり、遠望してはいない（写真⑧）。

そもそも、この南海龍王の廟は、現在一般に龍王として考えられている四海龍王の敖氏四兄弟より以前の信仰を残すものである。むろんこの像自体は新しく造り直されたものが多いが、それだけに、何故現在媽祖廟で一般的な姿を取らないのかが疑問に思われるところである。

先に引いた胡文和氏紹介の四川の石窟には、宋代の千里眼の像が収録されているが⁹⁾、この千里眼も遠望の形を取っていない。恐らく、千里眼は古くは遠望の形を取らず、後に七郎神や他の神の影響を受けて遠望するようになったのであると推察される。

もっとも、千里眼という神の成立もかなり複雑である。そもそも、千里眼も順風耳も元来は媽祖の配下ではなかった。周曉薇氏の論考によれば、千里眼と順風耳は、『西遊記』では玉皇上帝の部下として登場し、『南遊記』では華光大帝の部下となっている。しかも、『南遊記』ではこの両神は、そもそも古の離婁・師曠であると称している¹⁰⁾。さらに門神として有名な神荼・鬱壘との混同もある。

ただ、千里眼や順風耳がその性格から海神に関連する神と考えられるのは自然なことであると思われる。まさに海神である南海龍王の廟にこの両神が祀られるのは、極めて自然な現象であると考えられる。

4. 達奚司空について

広州の南海神廟には、もう一つ興味深い神像が祀られている。それは達奚司空の像である。通称、波羅像と呼ばれる（写真⑨）。

すなわち、招宝七郎や千里眼と同じく、片手を挙げて遠望する形を取る。さらに、この神はやはり海神の一つとして祀られている。三者の共通点は多い。この像自体は新しく作り直されたものであるが、古い伝承をふまえているとされる。

ただ、この達奚司空の由来については、招宝七郎以上に曖昧な点が多い。

伝承によれば、達奚はインドから渡来した菩提達磨の兄弟であり、強い神通力を持っていた。この広州に来て南海神に謁したが、南海龍王は達奚の神通力に敬意を表し、共に南海を治めようと誘った。その要請に応じて達奚は毎日海辺で船や空の様子を遠望し、ある日その姿勢で立ったまま没した。人々は彼の功績を讃えて達奚司空とした¹¹⁾。

むろん、このような話はいくまで伝承に過ぎない。黄淼章氏が指摘するように、菩提達磨が中国に来たのは六朝の梁時代であり、この南海神廟の創建は隋の開皇年間とされているので、全く時代が合わない¹²⁾。そもそも、達磨の兄弟などという記載からして怪しいものがある。

9) 前掲胡文和『四川道教仏教石窟芸術』16頁。

10) 周曉薇『四遊記叢考』（中国社会科学出版社・2005年）139～147頁。

11) 黄淼章『南海神廟』（広東人民出版社・2005年）48～49頁。

12) 前掲黄淼章『南海神廟』50頁。

しかし単に伝承として見過ごせない面もある。実は、この南海神廟は元来南海龍王の廟ではなく、波羅廟と呼ばれており、そもそもこの達奚司空の信仰が先に存在していたと考えられるからである。これについては、インドのマガダ国からの使者を祀ったものであるなどの多くの考え方が出されているようだが、やはり史実とは考えにくい¹³⁾。

ところで、招宝七郎とこの達奚司空との共通点は意外に多い。例えば、共に手を挙げて遠望する形を取る海神であること、招宝七郎は阿育王の子、達奚司空は達磨の弟など、インドから来たという伝承を背景に持つこと、中国の官僚風の衣冠を着けること、などである。時代的には、むしろ達奚司空の信仰が隋唐時に発生し、招宝七郎は宋代に信仰が盛んであったところからすれば、達奚から七郎への影響が想定可能であるが、しかしこれもまた憶測に過ぎない。海神という性格から遠望する姿が偶然に一致したとも考えられる。

おわりに

小論では、華光大帝の伽藍神や三眼という性格が、後に王靈官に転移したこと、また遠望する海神の形象が、達奚司空、招宝七郎、千里眼と転移していくことを中心に論じた。このような神の形象の転移の可能性は、偶然の一致という要素を排除できないため、あくまで蓋然性を指摘するに止まる。しかし、全くの偶然と断じるには、いささか難しい面もある。今後は、これらの説を補強するため、より多くの寺廟の事例を分析してみたい。

13) 前掲黄淼章『南海神廟』51頁。



写真①
宇治萬福寺の華光菩薩



写真②
武当山太和殿の馬靈官



写真③
広東仏山祖廟の馬靈官



写真④
上海白雲觀の王靈官



写真⑤
安徽九華山における王靈官



写真⑥
平戸瑞雲寺の招宝七郎



写真⑦
長崎崇福寺媽祖殿の千里眼



写真⑧
広州南海神廟の千里眼



写真⑨
広州南海神廟の達奚司空像